

# 「甘え」の世界から読み解く 乳幼児期の自閉症スペクトラムを

—MIUで診た乳幼児五五例の結果から

はじめに

ついこの前まで盛んに用いられていた「広汎性発達障害 pervasive developmental disorder: PDD」という用語が今では「自閉症スペクトラム障害 autism spectrum disorder: ASD」へと一気に塗り替えられつつある。DSMの強い影響である。

振り返ってみると「自閉症」はこれまで様々な名称で呼ばれてきた。「早期幼児自閉症 early infantile autism」に始まり、「小児(期)自閉症 childhood autism」、「自閉症とPDD」、そして今の「ASD」である。このような呼称の変遷を振り返ると、そこには「自閉症」概念が時代とともに大きく質的に変容を遂げていることが示唆されていて興味深い。

カナーが命名した「早期幼児自閉症」に

は、統合失調症の「自閉」との類似性への着目からその最早期型ではないかとの思いが反映し、「小児(期)自閉症」には、小児期(幼児期)に発症する精神疾患であるとの意味合いが込められていた。

しかし、その後自閉症類似の病態がいくつか提唱され、それらが疾病概念として認められるようになったことが「自閉症とPDD」の呼称変更へとつながり、さらには、乳幼児期のみならず生涯発達をも視野に入れ、かつ類縁疾患の鑑別に意を注ぐのではなく、対人関係障害を呈する病態を連続体として捉える必要性からASDの呼称が生まれたのではないか。今や対人関係障害を内実とする「自閉症」は類縁の病態を含め、すべてをスペクトラム(連続体)として捉える時代へと突入したということである。

自閉症研究のこれまでの歴史を振り返った時、今切実に求められているもののひとつは、乳幼児期早期の段階で、母子関係に困難をもつ子どもたちを、いまだ診断基準には該当しない萌芽段階から捉え、その後どのようにして診断概念に該当する病態へ変容していくか、それを前方視的に検討することである。そのことによつてはじめて、ASDとされる病態の成り立ち(成因)を解明する道が切り開かれると思われるからである。

## MIUで診た乳幼児五五例の 母子関係の様相

筆者は一四四年間(一九九四年四月〜二〇〇八年三月)にわたつて母子ユニット(Mother-Infant Unit: MIU)で行った関係

発達臨床で出会った母子関係に深刻な問題をもつ子どもたち、すなわち「自閉症スペクトラム」における対人関係障害の質的検討を手がけ、つい最近まとめることができた（小林、印刷中）。本稿ではその主な内容を解説しながら、ASDの成り立ちを、発達という観点からどのように理解することができるか私見を述べてみよう。

なお、ここで筆者がASDではなく「自閉症スペクトラム」と称しているのは、ASDという明確な病態を呈していない状態、つまりは親子関係がどこかしっくりこない状態からASDの病態を呈している子どもたちまで、すべてを含み込んだ形でその母子関係の様相を検討することによって、ASDの成り立ちを明らかにすることができるのではないかと考えたからである。

#### 対象となった子どもたち

筆者がMIUで実際に治療的に関与した事例は八一例（男性六六例、女性一五例）にのぼったが、その中で今回の対象となったものは、母子関係の様相を新奇場面法（SSP）という同一の枠組で観察しえた五五例（男性四九例、女性六例）である。最年少一歳〇ヵ月、最年長五歳九ヵ月であった。

年齢階層別では、一歳台八例（男女比六

対二）、二歳台一六例（二五対一）、三歳台一六例（一五対一）、四歳台一三例（一二対一）、五歳台二例（一对一）であった。〇歳台の事例はSSPの適用年齢ではなかったことから除外された。

知的発達水準では軽度遅滞（DQ五〇〜七〇）二八例（五〇・九％）と最も多く、全体の半数強を占めた。ついで、中等度（三五〜五〇）一二例（二一・八％）、境界域（七〇〜八五）と正常域（八五以上）はともに七例（一二・七％）、重度（三五未満）一例（一・八％）であった。

#### 母子関係をどのように観察するか

母子関係の様相の観察を一定の枠組で行うため、筆者は新奇場面法（SSP）を用いた。SSPはアタッチメント・パターンの評価のために作られた心理実験的枠組であるが、筆者は治療者という立場から、アタッチメント・パターンの評価という視点には馴染めず、「甘え」という視点から母子関係の様相を捉えた。なぜなら、行動科学的立場から生まれたアタッチメント研究は当然のことながらアタッチメントという子ども行動に特化し、それに焦点を当てている。そのため子どもと母親とのあいだで繰り広げられている繊細な関係を分断することになるが、それに

対して、母子双方のこころのありようを手がかりに治療を行う筆者は強い違和感を抱いたからである。さらに、そこで繰り広げられている母子関係の様相を素朴に観察していくと、「甘え」という観点から捉えることによつて、子どものこころの動きが手に取るように浮かび上がってくることを実感したからである。そのような観点からSSPで捉えられた母子関係の様相は、年齢層によって大きな変化が起こることが明らかとなった。本来SSPの適用年齢は一歳台であるが、今回二歳台以上も含めることによつて得られた知見である。

#### 「アンビヴァレンス」はどのように表に現れるか

これまで筆者は機会あるごとに一歳台の子どもたちの母子関係に見られる特徴について取り上げてきたが、それはあくまで一部の事例に限つての指摘であった。

今回一歳台八例すべてを改めて詳細にビデオ録画データをもとに検討してみた結果、全例において以下のような関係の特徴を抽出することができた。

「母親が直接関わろうとすると子どもは回避的になるが、いざ母親がいなくなると心細

い反応を示す。しかし、母親と再会する段になると再び回避的反應を示す」

そのため、両者の間でいつまで経っても好ましい関係の深まりが生まれず、逆に両者ともに強いフラストレーションを体験することによって、その関係は負の循環を生むことになる。

このような母子関係の独特なありようを筆者は「関係からみた「甘え」のアンビヴァレンス」(以下「アンビヴァレンス」と記す)と称したが、そこで子どもたちは「甘えたくても甘えられない」心理状態を体験することになる。

さらに重要なことは、一般には孤立によって心細くなれば、強い不安とともに悲しみや怒りが湧いてくるが、「アンビヴァレンス」の強い子どもたちはそれを直接母親に向けることができないうことである。本来ならば、そこで生まれた負の情動が抱っこされることによって快の情動へと変化し、心地よい体験となっていくが、彼らにはそれが期待できない。将来的に深刻な情動調整をめぐる問題を生むことにつながっていくことが危惧されるのである。

では先に述べた一歳台に認められた「アンビヴァレンス」が、それ以前の乳児期においても確認できるのであろうか。

SSPの適用年齢が一歳台であることから、乳児期の子どもたちは今回の対象に含まれていないが、対象五五例の母親から聴取された乳児期の特徴と筆者が直接観察しえた少数の事例からも「アンビヴァレンス」の現れと考えられる様々な反応が確認された。その多くは、母親の働きかけに対する回避的反應としてその異常に気づかれている。

乳児期も後半になって自力での移動運動も可能になっていくと、さらに明瞭な形で子どもの回避行動が顕在化している。抱かれるとむずかかって降りようとし、降ろされると再びむずかかって抱かれようとするといった子どものデリケートな反応である。「抱かれると離れようとし、離れると抱かれようとする」という、母との間で起こる関係の特徴は、すでにそこに明確な形で「アンビヴァレンス」を捉えることができる。そこには母子双方の間で悪循環が生じ、いつまでたっても母と子のあいだで好ましい身体接触が生まれえない。ここに母子関係の原初段階での問題を見て取ることができるのである。

さらに、直接観察が可能であった乳児三例において、乳児の回避的反應を母子関係の視点から捉え直すと、そこに母親の働きかけの「もつ知覚刺戟が子どもにはあまりにも侵入的に映ることによって、その刺戟を回避するた

めの反応であることが確認されている。

ただ注意すべきは、アタッチメント形成をめぐる問題が子どもに強い不安をもたらすことによって、母親からの刺戟がいかに些細なものであっても、子どもは過敏に、かつ侵入的に感じやすくなるということである。知覚刺戟がけっして当事者のいかなる心的状態にあっても、恒常的なものとして受け取られているわけではないからである。

以上のように、乳児期の子どもたちの行動特徴を母子関係の文脈で捉え直すと、そこには明確な形で「アンビヴァレンス」の特徴を見て取ることができる。

### 「アンビヴァレンス」による不安と緊張にどう対処するか

一歳台では子どもたちの「甘えたくても甘えられない」ための反応において、不安と緊張が第三者の目にも比較的わかりやすい形で表現されているが、二歳台の事例を通過した時、強烈に印象づけられるのが「アンビヴァレンス」の表現型が一気に多様化の様相を呈してきていることである。

「アンビヴァレンス」は子どもたちの「甘え」体験に阻害的に作用するため、いつまでも心細さは解消されず、強い不安と緊張に晒され

ることになる。それは子どもにとって過酷な事態であるため、少しでもそれを軽減しようとする様々なことを試みることになる。二歳台の子どもたちにもみられる多様な反応行動はそうした不安や緊張への対処行動として捉えることができる。二歳台の一六例の中から具体的に取り上げてみよう。

### (1) 対人回避的傾向から進展した対処行動—内 向的反応

自閉症という疾病概念が提唱されたのは、彼らに対人回避的態度が顕著であったからである。「自閉」という用語にはそのような意味合いが込められている。しかし、その対人回避的態度とも見える子どもたちの内面に焦点を当ててみると、さほど単純なものではないことがわかる。彼らは母親に対して「甘えたくても甘えられない」がゆえに、ことさら回避的態度を取っているというのである。それはわれわれ日本人にとっては馴染み深い屈折した「甘え」としての「拗ねる」態度として表現することができる。

筆者が一歳台の子どもたちの回避的行動をその気持ちの動きとともに捉え、「拗ねる」と描写することができたのは、母子関係の様相という視点から捉えることによって、子どもの行動の持つ意味が文脈の中で浮かび上が

ってきたからである。「個」の病理というところから自由になって初めて可能になったということである。

一般に彼らが「自閉的」と感じられているのは、このように回避的構えがとても強いことが大きな要因となっている。多くの場合、その背後に動いている「甘え」に気づくことが難しいことによって、次第に彼らはみずからの不安や緊張を緩和するため、孤独な中で多様な対処行動を取るようになる。それが二歳台になると顕在化してくることになる。

第一に、相手から距離をとって直接的な関わりを回避する。しかし、母親の存在が気になり、何かに集中することはできない。そのため母親の存在を気にしながら何かとサインめいた行動を取るが、一定の距離をとってそれ以上には近づかないという行動である。そのような子どもの行動は、われわれには「気が移りが激しい」、「多動」、あるいは「落ち着きのない」状態として映る。

第二に、母親に対して直接的な関与を回避し、自己充足的な方法で対処しようとする行動である。それは何かによって気を紛らわし、不安と緊張を多少なりとも和らげようとするための行動である。これまで「繰り返す行動」、「常同反復行動」として捉えられてきたものである。

第三に、自分の周りの環境を極力変化の無い状態に保とうとする対処行動である。不安が強く安心が得られない状態に置かれると、周囲の知覚刺激が子どもたちにとって不快で不安を駆り立てるような色彩を帯びたものになる。そのため、子どもたちは周囲の世界を極力変化のない状態に保とうとする。われわれには些細と思われるような変化が子どもたちには強い不安を引き起こすからである。「同一性保持 sameness」などと言われ、自閉症に特徴的なものとされてきたものである。

第四に、常に他者との関わりを回避していくならば、他者に依存することはできず、結果的に「過度に自立的に振る舞う」ようになる。自分で思うようにならない時でも他者の力を借りることなく、あくまでひとりで行うとする。対人回避的で自閉的と印象づけられる行動を取るがゆえの必然的な結果である。

以上の内容を改めて眺めてみると、これらの対処行動の大半はASDの診断において中核的な症状として取り上げられているものであることに気づかされる。「自閉的な対人行動」、「常同反復的行動」、「強迫的こだわり」などである。

これらの行動特徴はこれまで一次的障害として捉えられ、脳障害との関連が強いものと

して理解されているが、今回の研究によれば、母子関係において生まれた「アンビヴァレンス」すなわち「甘えたくても甘えられない」ことによって必然的に生まれた反応行動であることがわかる。「甘え」に焦点を当てることによってこれらの行動はすべて一元的に理解できるのである。

## ② 相手との関係を求めるための対処行動—外向的反応

つぎに取り上げるのは、子どもの方から直接的に母親に何らかの関わりを志向しながら対処しようとする試みである。先の対処行動を内向的反応とするならば、このような対処行動は外向的反応だといえることができる。この種の対処行動は母子関係をより一層複雑なものにしていく。なぜならそれによって母親にもより屈折した反応を誘発することになりやすいからである。それは以下のような形を示している。

なんとか母親の関心を自分に引き寄せようとして、相手の嫌がることをやろうとする。「甘えたくても甘えられない」子どもにとつてある意味では自然な反応だということもできるが、それはこれまで「挑発行動」といわれてきたものに該当しよう。

このような行動に対して用いられてきた

「挑発行動」という表現は、子どもの立場から捉えたものではなく、われわれ大人の視点から捉えたものである。子どもたちはけっしてわれわれを挑発して相手の怒りを引き出すと企んでこのような行動を取っているのではない。あくまでその動機は「甘えたくても甘えられない」ために、相手の関心を自分に引き寄せたいという「甘え」に端を発したものである。つまり、「甘え」を背景に生まれた「関係」の問題として捉えることが大切だということである。

しかし、このような対処行動はあまり功を奏することはない。相手の嫌がることをやれば、相手の関心を引き出すことには成功しても、叱咤されることによって結果的には突き放される。すると子どもは再び心細さから不安に襲われる。それがさらなる相手の関心を引き出すための「挑発行動」を誘発する。このようにして母子関係の悪循環は進展していく。思春期以降に頻発する行動障碍の多くはこのような関係の悪循環によってもたらされたものである。将来的に悲惨な結果を生む対処行動である。

ついで取り上げたいのは、先の「挑発行動」が直接相手に向けられた行動であるのに比して、相手の関心を自分に引き寄せようとする点では同じ目的をもつが、行動としては

直接自分に向けられたものがある。それがわざとらしく壁に頭を打ち付けるなどの注意喚起行動としての「自己刺戟行動」である。

「自己刺戟行動」も先の「挑発行動」と同様、功を奏することはない。時には、相手から同情の念を示されることはあっても「甘え」そのものが享受されることは期待できない。相手からは制止され、禁止されることになる。すると子どもは当初の意図が達成されず、突き放されることによってより一層心細さは強まっていく。その結果、「自己刺戟行動」はより一層激しいものになっていく。「自傷」と称されてきたものは注意喚起行動としての「自己刺戟行動」が発展したものとして捉えることができるのではないか。このような「自己刺戟行動」は情動負荷を軽減する働きをも担っていることから習慣化しやすい。

## ③ 相手の顔色をつかがう行動から進展した対処行動

「甘えたくても甘えられない」子どもたちは、いつまでたっても「甘え」を断念することができず、常に母親の顔色を伺うようになる。それを土居（一九五八）は「変態的な依頼関係」と称したが、そのような状態にあって、子どもたちはなんとか母親との関係を維

持しようとして試みる対処行動は、その深刻さの度合いからいくつかに分類できる。

第一に、「甘えたくても甘えられない」子どもがなおも母親との繋がりを求めようとす  
る際に、最も穏便な解決方法は、相手の意向に沿って行動することである。相手の怒りを引き起こすことなく、相手も喜んで受け入れてくれるからである。その典型的な対処行動が「いい子になる」ことである。相手の期待に沿うことによって自分の存在を認めてもらおうとする試みである。

このことを筆者に最も印象づけた男児（二歳八カ月）がいる。ひとりぼっちになって心細いにもかかわらず、泣かずに我慢していたことを母親に認めてもらいたかったのか、子どもの顔を拭くために母親が差し出したハンカチを自分で取り上げ、母親の鞆に仕舞い、自分から拍手をして母親にもそれを要求しているのである。あまりにもいたいいけな子どもの振る舞いである。

第二に、先の相手の意向に従うことと近縁の反応であるが、相手の意向が読みにくい場合、子どもはたじろぎ、どう対処すれば良いか困惑が強い。そこで相手の意向を常にうかがいながら、相手に気に入られようと懸命に振る舞うようになる。「相手に取り入る」、「媚びる」などと表現できるような言動であ

る。このような対処行動はわれわれには演技的色彩を帯びて映りやすいが、子どもも母の母親との関係を維持しようとする懸命な動きとして捉えることができる。それでも「甘え」が得られない時には、母親が見ている前でストレンジャーである他人に甘えてみせて、母親に「当てつける」、「見せつける」ようになる。

第三に、「いい子になる」ことが、自分なりの能動的な対処行動であるとするならば、次に問題となるのは、自分の欲求や意思を全面的に押し殺し、相手の思いに「過度に従順に振る舞う」ことである。その結果相手の思いに翻弄されることになる。母親の価値観に引きずられるようにして母親の誘いに乗せられていけば、このような結果を生む危険性が高まる。それほど子どもは無力な存在だということである。このような対処行動がいかに痛々しいものかは誰でも想像できようが、われわれが特に問題としなければならないのは、それが後々深刻な自我障害をもたらすからである。

#### (4) 明確な対処法を見出すことができず周囲に 圧倒された状態

最後に、最も深刻なものは、自分なりの効果的な対処行動を見いだすことができず、周

囲に圧倒され、なす術をなくしている状態にある場合である。強い「困惑」が生まれ、「茫然自失」となっていく。ここでは周囲の刺戟が子どもたちにとって圧倒的な力をもって侵入的あるいは侵襲的に映り、迫害的な不安に襲われていると想像できる状態である。そのため、彼らは自分でその場から逃げることも、誰かに助けを求めることもできない。まさに全身が凍り付いたような状態を呈するようになる。それは精神病理学的には「カタトニア」と称される病態と同質のものだと考えられる。

この種の行動は、先ほどまでの対処行動と同列に並べることができないほどより深刻なものである。精神病的反応とはまさにこのような状態ではなからうかと推測されるのである。

以上、二歳台になって顕在化する多様な対処行動を見てきたが、三歳台以降になると、それはより一層複雑になるとともに、子ども自身が母親や第三者の前で「アンビヴァレンス」それ自体を容易には表に出さなくなる。その意味でも生後三年間を中心に母子関係の様相を観察した今回の結果は、これまでASDの症状や障害と記述されてきたものの成り立ちを考える上で大きな示唆をわれわれに与

えてくれるのではなからうか。

## 母親の言動も子どものそれとの関数で捉えること

これまで子どもの対処行動を中心に述べてきたが、「甘え」が享受できるか否かは相手次第であることを考えるとこのような子どもの対処行動を引き出した要因として、母親の振る舞いが関係していることは否定し難いが、それと同時に忘れてならないのは、母親の振る舞い自体も子どもの様々な対処行動によつて誘発されているということである。そこに「関係障碍」として捉えることの重要性があるのであって、双方の反応がまさに「関係」の中で生起しているということである。

母原病なども称されていた過去の心因論的な考え方の最大の問題点は、現時点での母親の性格や子どもへの関わり方の特徴と子どもとの病態との関係を短絡的に関連づけ、直線的因果論でもって結論を導きだした点にある。

現時点での母子関係の様相は、生誕直後の母子の関わり合いの中で何らかのねじれが生じ、そこで起こったボタンの掛け違いが負の循環をもたらし、それが肥大化した結果を示しているのだ。子どもや母親の示す旨助の原

因を、相手の旨助と直線的因果論で結びつけることがあつてはならない。今目の前で捉えられる母子双方の旨助がいかなる背景のもとに現われたものか、歴史的、社会的、心理的観点から丁寧に掘り起こして理解していこうとする姿勢が大切なのである。

### おわりに

「自閉症スペクトラム」とされる子どもたちの生後三年間を中心とした母子関係の様相を、最近の筆者の研究結果を紹介する中で解説してきた。そこで筆者が教えられたのは、ASDとされる子どもたちが、けつしてわれわれの想像もつかないような世界で生きている存在ではなく、われわれと同じ地平で、われわれと同じ気持ちを抱きながら生きている存在だということである。それを可能にしてくれたのは、従来のアタッチメント研究にみられる行動科学的立場からではなく、「甘え」というこころの動きに焦点を当てた立場からの観察である。わが国特有の文化である「甘え」の観点は、人間関係のこころ(情助)の動きを捉える上で極めて大きな力となることを、筆者は今回の研究を通して改めて実感した。

発達障害を生産過程で捉えようとする今日的な動向の中で、ASDの生涯発達を理解す

るうえで、「甘え」の「アンビヴァレンス」を鍵概念とした理解の視点はわれわれにとつて大きな力となるのではないか。

常日頃、われわれ日本人は日本語を介して人間を理解している。われわれの認識世界は当該のことば文化と切つても切れない関係にあるのだ。筆者が「甘え」の観点を大切にしているのはそのような理由によるが、いまだに外来の専門用語を通じた理解が重宝がられている。人間を日常語で理解することの大切さを生涯にわたつて主張し続けたのは「甘え」理論の提唱者である土居健郎(一九九四)である。数少ないわが国独自に生み出された人間論を忘れたくないものである。

### (文献)

土居健郎「神経質の精神病理―特に「とらわれ」の精神力学について」『精神神経学雑誌』六〇巻、七三三―七四四頁、一九五八年(土居健郎「日常語の精神医学」九―三九頁、医学書院、一九九四年所収) 土居健郎「日常語の精神医学」医学書院、一九九四年

小林隆児「乳幼児期の自閉症スペクトラムを関係から徹底解剖する」(仮題) ミネルヴァ書房、印刷中